

と く
徳

ほ う
朋

死すべき生

中川 皓三郎
こうざぶろう

なかがわ こうざぶろう
1943-2020
大阪府出身。元大谷大学短期大学部教授。元帯広大谷短期大学学長。

私たち人間には、何が正しくて何が正しくないのかを見分けて判断する能力があり、みんなその力を前提にして、その力をたのんでどうすることが良いことなのか、という事を考えながら生きてきたと言っていいと思います。(中略)そして私たちはみんな自分の思い通りになること、思いがかなう生き方を求めているのではないかという事です。思ったことが、思ったように実現すれば幸せだと、そういうことを願って生きてきたのだと言っていいと思います。このところに実は大きい問題があるんです。

みなさんは釈尊しゃくそん(おしゃかさま)がどういう問題に出会って出家されたかということは聞いているでしょう。それは死を見たということ。お経に「見老病死けんろうびょうし、悟世非常ごせひじょう」という言葉があるんですが、「老・病・死を見て世の非常きとを悟る」ということです。老い、病み、死んでいくのちを生きている人間の姿を見たという事は、もうこの世の中に確かなものは何もないということが分かったという事です。ところが、私たちは自分の死を見ようとしません。皆さんはどうですか。毎日自分は必ず死ぬと考えて生きておられますか。

私は直接お会いしたことはないのですが、ある先生が亡くなっていかれる時に、「おまえも死ぬぞ」という色紙をいっぱい書かれたというのです。毎日その色紙を見て私は死ぬいのちを今生きている、と。だから本当に今を大切にしなければならないのです。私たちは、やがて死

ぬと思っていますけれども、明日とは思っていないわけです。「おまえも死ぬぞ」と言われても、自分の死だけは先送りしているんです。確かに人間は今日の科学技術の力によって、今まで不可能だと考えられていたようなことを、次々と実現してきた訳です。そして以前なら治らないといわれていた病気が治っていく。そのことは誰でも結構なことだと思っておられる事でしょう。確かにそれはそれで結構な事なのです。ところが本当に結構なことなのでしょうか。結構だというところには、死ぬいのちを生きているにもかかわらず自分の死を見ない。そこには生きることはどこまでも喜ばしいのであって、死ぬことは喜ばしい事ではないのだという分別が入っている訳ですね。そして、限りなくこの生を引き延ばそうとしている。だけど、そのことがどれほどの迷いなのかということが分からない。こういう問題ですね。

要するに人が生きるということにはいったいどういう問題があるのか。人間として生まれたということは、人間として^な為さねばならないことがある。そして本当に^な為さねばならない事を^な為すことによって、私たちはこの世に人として生まれた事、人として生きた事と、そのことを喜ばしい事として、「ありがとう」と言って自分の人生を終えていけることなのでしょう。

（『生きるとは』）

私たちは願いや思いが叶う事が幸せの条件だと当たり前のように考えていますが、そこに問題提起を行うのが仏教です。「あなたが本当に願っている事は、それですか」「それで本当に死んでいけますか」という問いが私たちに投げかけられています。（哲弘 拝）



この「徳朋」は仏教を^{とくほう}抛り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

